MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

# ミステリ読書案内

2019. 12. 6　発行元
第６号　伊藤　剛

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

## 中・高校生にお薦めの本その１

私は４０年以上に渡り、中学校の教員の仕事をしてきている。学校をいると、「中学生・高校生にお薦めの本」を頼まれることもある。その都度、工夫して変化を持たせて本を紹介するようにしている。では……。

**私の願い「本好き人間になってほしい！」**

子どもたちに「**小説好きになってほしい！**」ということ

別に「ミステリ好きになってほしい」なんて望まない。とにかく、本が好きになってほしいし、できれば小説好きになってほしいと願っている。１０人に１人でいい。「本好き人間」を育てたい。

若い頃、本は何でもよいのだ。夏目漱石でも、芥川龍之介でも、ドフトエフスキーでも、シェイクスピアでも誰でもいいのだ。そんな中から自分に合ったものを探せばよいのだから。

とにかく「古典の素養」を身につけることが絶対条件だ。活躍中のミステリ作家の中から、４人、この人は基礎からの文学的知識の積み上げができていると感じる人を選んでみた。今流行りのライト系作家だけでなく、真の実力が伴った作家の本を読んでほしい。と、願う。

### 北村薫『覆面作家は二人いる』

北村薫と言えば『空飛ぶ馬』『夜の蝉』などを薦めるべきなのかもしれないが、あえて『覆面作家は二人いる』の方を挙げてみた。北村の作品を読むと作者の文学好きがよく伝わってくる。若者向けの話がとても上手だ。

角川文庫から出ている。１９歳のお嬢様名探偵シリーズ。３冊ある。『覆面作家は二人いる』に続くのが『覆面作家の愛の歌』『覆面作家の夢の家』となる。北村が得意とする“日常生活の謎”が鮮やかに解き明かされていく。心温まる物語の連作集となっている。私は、こういう軟らかい感覚を子どもたちに感じてほしいのだ。

### 米澤穂信『春期限定いちごタルト事件』

米澤穂信は実力者である。有名な『古典部シリーズ』は別号で紹介する予定。米澤が、こちらの創元推理文庫版の『春季限定いちごタルト事件』を出版したあたりには、想像もつかなかったが、今ではミステリ界の第一人者。各種年間ランキングにおいて、毎年のベスト１０入りである。

このシリーズは『小市民シリーズ』と呼ばれ、『春季限定いちごタルト事件』の後は、『夏季限定トロピカルパフェ事件』『秋季限定栗きんとん事件』と続いていく。高校１年生の小鳩君と小山内さんのコミカルな探偵物語。読み始めると一気に読める。

### 宮部みゆき『パーフェクト・ブルー』

大作家宮部みゆきの記念すべき長編第一作。現在は創元推理文庫版で手に入れることができる。元警察犬のマサが「俺」の一人称で語る独特の形式。蓮見探偵事務所の加代子と落ちこぼれの少年・進也とともに事件の解決をめざす物語。

マサのお話は、この後『心とろかすような』という短編集に引き継がれている。上質なミステリである。宮部は本当に物語を作るのが上手だ。よく考えられたストーリーで、思いがけない伏線も張られていて、結末に向かう流れが読み手の気持ちにすっと入ってくる。

### 西尾維新『クビキリサイクル・青色サヴァンと戯言遣い』

学校にいると、年配の方や生徒の保護者の方からは、「こんな本のどこがいいんだ」と言われそうな気もするが、私は西尾維新という作家を評価している。本書は２００２年のメフィスト賞受賞作。もう１７年も前。当時はベストセラーだった。古書店でも高価買取目録に載っていた。（今はもう１０８円コーナーになってしまったけれど。）

最初に出版されたのは講談社ノベルス。人目を引く表紙もなかなか凝ったデザイン。“青春エンタメ”と書いてある。この“戯言（ざれごと）遣い”シリーズは、『クビシメロマンチスト』『クビツリハイスクール』『サイコロジカル（上下）』『ヒトクイマジカル』『ネコソギラジカル』と続いていく。今現在、たくさん、たくさんある西尾維新ワールドの原点となったシリーズである。言葉に飾られた、独特の、煌びやかな、作られた世界。一旦嵌まってしまうと、どっぷり浸かってしまう。